

新出『中論頌』の系統をめぐって

齋 藤 明

はじめに

周知のように、ナーガールジュナ作の『中論頌』(MK)には複数の伝承がある。すなわち、『無畏論』(ABh, Tib), 『仏護注』(BP, Tib), 『般若灯論』(PP, Tib, Ch), 『明句論』(PSP, Skt, Tib), これに漢訳(Ch)としてのみ伝わる青目注『中論』および安慧注『大乘中観釈論』が加えられ、これらの注釈の中に引用される形で『中論頌』は伝えられてきた。この他に、最終的に『明句論』に一致する内容に校訂され、チベット語訳(Tib)としてのみ伝わる『般若』という名の根本中論頌が単行のテキストとしてある¹⁾。『中論頌』をとりまく従来の状況は以上の通りであった。

このような中で、近年、北京大学の Ye Shaoyong (葉少勇)氏は7世紀頃と推定される『仏護注』(11葉)および『中論頌』(3葉)の総計14葉からなる貴重なサンスクリット語貝葉写本を同定し、その詳細な研究を公にした²⁾。いずれも不完全な写本で、前者の『仏護注』は全体のおよそ1/9程度、後者の『中論頌』は総数約445偈中の106.5偈を収め、『中論頌』全体の1/4弱に相当する。この発見は画期的なもので、不完全な写本とはいえ、これまで『中論頌』のサンスクリット語テキストといえ、チャンドラキールティ作の『明句論』にのみ依拠してきた研究環境が大きく変わったのである。とくに、7世紀頃の写本であれば、9世紀初頭のチベット語訳以前の古形を伝えるもので、チャンドラキールティの活躍年度よりも古い可能性も小さくない。そこで、本稿では『中論頌』の諸注釈に引用される『中論頌』の出入りおよび配列順序等を比較検討したうえで、改めて新出『中論頌』の系統を考察したい。

1. 『中論頌』テキストの外形的相違

以下ではまず、諸注釈に引用される『中論頌』の外形的な異同を確認しておき

(112)

新出『中論頌』の系統をめぐって(斎藤)

たい。ここでは、訳文を含むテキストとしての信頼度を勘案して、青目注、『無畏論』、『仏護注』、『般若灯論』、および『明句論』を考察の対象とする。表1は各注釈に引かれる章別の偈頌数を、また表2は偈頌の順序および出入りに関する異同を示している。表1内のMK msは今回発見された『中論頌』のテキストで、○は章全体をカバーし、△は章の一部のみが含まれることをさす。一方またMK in BPは、発見された『仏護注』が引用する『中論頌』をさす。なお、表2の中で、あえて偈頌番号の順序を逆にしたアンダーライン箇所は、他の注釈に引用される対応偈頌の順序と相違することを示す。また、同表中のダッシュ(-)は直接に対応する偈頌がないことを意味する。

表1 諸注釈に引用される『中論』章別偈頌数

章	青目注	ABh	BP	PP	PSP	MK ms	MK in BP
(八不偈)	2	2	2	2	2		
1	14	14	14	14	14		
2	25	25	25	25	25		kk.5-16
3	8	8	8	8	8		
4	9	9	9	9	9		
5	8	8	8	8	8		
6	10	10	10	10	10		
7	35	34	34	34	34		kk.1-33*
8	12	13	13	13	13		k.13
9	12	12	12	12	12	△ kk.10-12	kk.1-3
10	16	16	16	16	16	○ kk.1-16	kk.2-8
11	8	8	8	8	8	○ kk.1-8	
12	10	9	9	9	10	△ kk.1-8ab	
13	9	8	8	8	8		kk.7-8
14	8	8	8	8	8		kk.1-2
15	11	11	11	11	11		
16	10	10	10	10	10		
17	33	33	33	33	33	△ kk.29-33	
18	12	12	12	12	12	○ kk.1-12	
19	6	6	6	6	6	○ kk.1-6	
20	24	24	24	24	24	○ kk.1-24	kk.11cd-18
21	20	21	21	21	21	○ kk.1-20	
22	16	16	16	16	16	△ kk.1-5	
23	24	24	24	24	25		
24	40	40	40	40	40		
25	24	24	24	24	24		
(計)	406	405	405	405	407)		

新出『中論頌』の系統をめぐって(斎藤)

(113)

26	9	12	12	12	12		
27	30	30	30	30	30		
総計	445	447	447	447	449	106.5	56

* 3, 15-17, 22d-29 欠

表2 諸注釈に引用される『中論』偈頌の形式的相違(順序, 出入等)

章	青目注	ABh	BP	PP	PSP	備考
1	<u>3</u>	<u>3</u>	2	2	2	2: 四縁説
	<u>2</u>	<u>2</u>	3	3	3	3: 自性, 他性批判
	<u>9</u>	8	8	8	8	8: 所縁縁批判
	<u>8</u>	9	9	9	9	9: 無間縁批判
2	<u>11</u>	10	10	10	10	
	<u>10</u>	11	11	11	11	
7	-	7	7	7	7	
	7	-	-	-	-	
	8	-	-	-	-	
	9	8	8	8	8	
8	-	11	11	11	11	青目注は ABh 等が引く第 11 偈を直前の第 10 偈とまとめて訳出.
	11	12	12	12	12	
12	6	-	-	-	6	
13	4	-	-	-	-	
	5	4	4	4	4	
21	3	3	3	3	3	青目注は ABh 等が引く第 5 偈を第 3 偈にまとめて訳出.
	4	4	4	4	4	
	-	5	5	5	5	
23	19	19	19	19	19	
	-	-	-	-	20	
25	<u>16</u>	15	15	15	15	
	<u>15</u>	16	16	16	16	
26	4	4	4	4	4	青目注は ABh 等が引く第 4-6ab 偈を第 4 偈にまとめて訳出.
	-	5	5	5	5	
	-	6ab	6ab	6ab	6ab	

(114)

新出『中論頌』の系統をめぐって (斎藤)

	5	6cd	6cd	6cd	6cd	青目注は ABh 等が引く第 6cd-7 偈を第 5 偈にまとめて訳出。
	-	7	7	7	7	
	-	11	11	11	11	

『中論頌』をめぐるとの外形的な相違は以上のとおりである。2つの表が示す外形的な相違にも一部反映されているが、引用される『中論頌』の内容的異同、および成立年代という2つの視点から見ると、上記の5つの注釈は、6世紀以前に成立した4つの注釈（青目注、『無畏論』、『仏護注』、『般若灯論』）と、7世紀以降の『明句論』に大別される³⁾。以下では、これら両者の伝承を『中論頌』の伝承に関する初期と後期と名づけることとする。

2. 新出『中論頌』と初期伝承

さて、問題は新出『中論頌』の系統である。まず、Ye[2007b]pp.154-167も結論するように、新出の『中論頌』が初期の伝承に属することは再論するまでもない。ちなみに、表1が示すように、新出『中論頌』(MK ms)と『仏護注』所引の『中論頌』(MK in BP)とに共通する偈頌には、MK 10.2-8, 20.11-18の総計15偈がある。いずれの写本（厳密にはそれらのマイクロフィルム）にも判読困難な文字は少なくないが、これら15偈のテキスト内容に関しては、両者の間に明確な相違は確認されない⁴⁾。これに対して、当該『中論頌』が初期のテキスト伝承であることは、以下の2例からも明らかである。

その第1は、10.7bの *prāpnuyāt kāmam indhanam/* (MK ms = MK in BP) と *indhanam kāmam āpnuyāt/* (PSP) 「たしかに [火は] 燃料と関係するであろう」のテキストである⁵⁾。この例では、意味内容上の相違はなく、韻律上の問題もない。また、チベット語訳 (*shing dang phrad par 'dod la rag//*) も初期、後期の4注釈に共通する。相違はサンスクリット文のみであるが、当該『中論頌』のテキストは『仏護注』のそれに一致し、『明句論』所引の偈頌テキストとは相違する。『無畏論』および『般若灯論』との異同については、これら両注釈のサンスクリット本が未発見であるため明らかではない。しかしながら、以下にみる第2の例や、同じ *Klu'i rgyal mtshan* 訳のこれら3注釈所引偈のテキスト上の一般的な近似性からも、両注釈に引用された『中論頌』のテキストもまた新出『中論頌』および『仏護注』のそれと一致していた可能性は大きい。ちなみに青目注は「至於彼可燃 (=彼の

可燃に至らん)」で、いずれのテキストにも対応する。

偈頌のテキストが相違する第2の例は、20.13 および 14 である。20.13 では冒頭の *nājatasya* (MK ms = MK in BP) と *na jātasya* (PSP) の相違、20.14 では同じく冒頭の *na jātasya* (MK ms = MK in BP) と *nājātasya* (PSP) の相違である。当該2偈の新出『中論頌』および『仏護注』のテキストは、

nājātasya hy ajātena phalasya saha hetunā/
nātītena na jātena saṃgatir jātu vidyate// (13)

na jātasya hi jātena phalasya saha hetunā/
nājātena na naṣṭena saṃgatir jātu vidyate// (14) (Ye[2007a] p.127, Ye[2008] p.147)

いまだ生じていない [未来の] 結果が、いまだ生じていない [未来の] 原因と、過去の [原因] と、すでに生じている [現在の原因] と関係することは決してない。

すでに生じている [現在の] 結果が、すでに生じている [現在の] 原因と、いまだ生じていない [未来の原因] と、消失している [過去の原因] と関係することは決してない。

とある。これに対して、上述の『明句論』のテキストによれば、両偈は「すでに生じた [現在の] 結果が……」(13), 「いまだ生じていない [未来の] 結果が……」(14) の訳文となる。当該箇所を除いたテキスト上の相違からみて、両偈頌の相違は順序の相違ではなく、下線部のテキストに関する相違の例といえる。この相違は、初期と後期の伝承上の相違を反映している。すなわち、Klu'i rgyal mtshan 訳の『無畏論』『仏護注』『般若灯論』は当該句をそれぞれ *ma skyes....ma yin no//* (20.13), *skyes pa....ma yin no//* (20.14) と訳出し、一方また『明句論』の訳文は、それぞれ *skyes pa....ma yin no//*, *ma skyes pa....ma yin no//* であり、上述のサンスクリット文の相違を適切に反映している。また、青目注は、これら両偈を

若言未来因 而於未来果 現在過去果 是則終不合 (=若し未来の因と言わば、而ち未来の果と、現在と過去の果に、是れ則ち終に合せず)

若言現在因 而於現在果 未来過去果 是則終不合 (T vol.30, 27a25-28)

とあり、下線部は初期の伝承と一致する。なお、青目注は「因」と「果」を逆に訳出するが、注釈部 (同 a29-b3) は上記の新出『中論頌』のサンスクリット文に対応した解説をなしており、問題はむしろ偈頌部の訳文にあると考えられる。

以上のように、上述の2例を見るかぎりでも、新出『中論頌』が初期の伝承に属することは明らかである。Ye[2007b] pp.156-167 は、上述の第2の例をふくむ7つのケースを詳細に検討し、いずれも初期の伝承に一致し、後期の『明句論』のテキスト伝承とは不一致であることを例証している⁶⁾。

(116)

新出『中論頌』の系統をめぐって (斎藤)

3. 新出『中論頌』の系統をめぐって

先に言及したように、新出『中論頌』は総計 106.5 偈を収める不完全写本であり、一方また全体の 1/9 程度の不完全写本である『仏護注』も、そこに引用される『中論頌』の総数は 56 にとどまっている。したがって、今の段階で新出『中論頌』の系統について確実に言えるのは、そのテキスト伝承は『仏護注』を含む 4 注釈系、つまり『中論頌』の初期の伝承に含まれるということである。

ただし、新出『中論頌』には、初期の伝承に属する 4 つの注釈文献に引用される偈頌と比較して、いくつかの興味深い事実がある。たとえば、Ye[2007b] p.156 は、新出『中論頌』と、『無畏論』、『仏護注』、『般若灯論』の 3 注釈が引用する偈頌との距離を物語る例として 5 つを挙げる。その中の 2 つは、第 9 章と第 11 章の章題の相違に関わる。ただし、総計で 8 章の章題を伝える新出『中論頌』の章題にみる特殊性（第 9, 17, 18 章）や、章題のオリジナリティーに関する疑問を勘案するとき、系統を考える際の判断材料として、偈頌の内容的な相違と章題の相違とを同列に扱うことには慎重であるべきであろう。

Ye 氏が扱う上記 2 例を除く MK 10.13, 12.6, 21.5 の 3 つの例はきわめて興味深い。相違する内容と程度は異なるものの、いずれも『無畏論』、『仏護注』、『般若灯論』とは相違し、結果として青目注に一致するからである。MK 10.13 の相違は、以下の通りである。

PSP : āgacchaty anyato nāgnir indhane 'gnir na vidyate/

atrendhane śeṣam uktaṃ gamyamānagatāgataih// (LVP pp.210.3, 211.7 ; de Jong, p.15)

火は [燃料と] 別なところからは来ない。[一方また] 火は燃料の中にはない。

この燃料に関する残り [の批判] は、[第 2 章の]「行かれつつあるところ・すでに行ったところ・いまだ行っていないところ」[に関する批判的考察] によって説明されている。

ABh, BP, PP : me ni gzhan las ni 'ong ste// shing la'ang me ni yod ma yin//

song dang ma song bgom pa yis// de bzhin shing la lhag ma bstan//

(前半偈の訳文は PSP に同じ)。行かれつつあるところ・すでに行ったところ・いまだ行っていないところ [に関する批判的考察] によって、同様に、燃料に関する残り [の批判] は説明されている。(= *tathendhane...)

なお、PSP の上記のテキストは注釈内容 (LVP p.211.7-9) にも合致する。ただし、その Tib 訳は後半偈を de bzhin shing gi lhag ma ni// song dang ma song bgom pas brtan// と訳すが、de bzhin (= *tathā) は『仏護注』等の 3 注釈の訳者 Klu'i rgyal mtshan

の訳語を訂正しそびれたといえようか。

以上の両者に対して、新出『中論頌』の当該箇所テキストは *athendhanam* (Ye [2007a] p.122 (n.3): read *tathendhanam*) である。このテキストによれば、後半偈は、「燃料も [火と別にあるのでもなく、火の中にあるのでもないという点で] 同様である。残り [の批判的考察] は、……。」となる。興味深いのは、この後半偈は、以下のような青目注の引用偈および注釈内容に一致するという点である。

可燃亦如是 餘如去來說 (= 13d)……. 可燃亦如是. 不從餘處來入燃中. 燃中亦無可燃. 如燃已不燃未燃不燃燃時燃不. 是義如去來中說. (= 可燃も亦是の如し. 餘は去來に説けるが如し. …… . 可燃も亦是の如し. 餘處より來りて燃中に入るにあらず. 燃の中にも亦可燃無し. 燃じ已るは燃ぜず. 未だ燃ぜざるも燃ぜず. 燃時も燃ぜず. 是の義去來中に説けるが如し.) (T vol.30, 27a25–28)

他の MK12.6, 21.5 の 2 例は偈頌の出入りに関係する。「苦の考察」を章題とする第 12 章であるが、新出『中論頌』および『明句論』では、12.5–7 の 3 偈により苦は他者によって作られるという苦の他作説を批判する。その中の 12.5 および 6 は、形式的に類似した構成をもつ。

*parapudgalajam duḥkham yadi yasmai pradiyate/
pareṇa kṛtvā tad duḥkham sa duḥkhena vinā kutah// (12.5)*

*parapudgalajam duḥkham yadi kaḥ parapudgalah/
vinā duḥkhena yaḥ kṛtvā parasmai prahiṇoti tat// (12.6)*

もしも苦が他の人 (B) によって生じるものであるなら、他 [の人] によって作られ、ある人 (A) にその苦が与えられるとき、そ [のある人 (A)] は苦なくしてどこにあるうか。

もしも苦が他の人 (B) によって生じるものであるなら、それ (苦) を作って別 [な人 (A)] に送り与える他の人 (B) というのは、苦なくして何ものであるうか。

この 12.6 は、初期の伝承では新出『中論頌』および青目注にあるが、『仏護注』等の 3 つの注釈にはないという点が注目される。青目注には、「苦若彼人作 持與此人者 離苦何有人 而能授於此」(= 苦若し彼の人作りて、持して此の人に與うれば、苦を離れたるに何ぞ人有りて、而も能く此れに授けん) (T vol.30, 16c26–27) とあり、新出『中論頌』に一致する。

第 3 は、「生成と破壊の考察」を章題とする第 21 章 (21.5) の例である。第 1 偈から第 6 偈までは、第 1 偈にあるように、破壊 (*vibhava*) は生成 (*sambhava*) なくしても [生成と] とともに [= 同時に] あることもなく、生成は破壊なくしても [破壊と] とともに [= 同時に] あることもない⁷⁾、という前半と後半とで主客を

(118) 新出『中論頌』の系統をめぐって (斎藤)

入れ替えた否定論証を詳説する。第2, 第3の両偈が前者の論証, 第4, 第5偈が後者の論証に当てられ, 第6偈がこれらを受けて, 生成と破壊の両者は成立しないと結論する。『仏護注』等に引かれる初期伝承の3つの『中論頌』も, 『明句論』所引の同偈も以上のような文脈で6偈をそれぞれに解説する。しかしながら, 新出『中論頌』には, 以下のような第5偈が存在しない。

sambhavo vibhavenaiva katham saha bhaviṣyati/
na janma maraṇam caiva tulyakālam hi vidyate//

生成は破壊と同時にどうして存在するであろうか。なぜなら, 生と死は同じ時には存在しないのであるから。(21.5)

『仏護注』等の3注釈は, ほぼ同一内容の偈頌をチベット語訳として伝承する。ただし後半偈は, *skye ba 'chi dang dus gcig tu// yod pa nyid du mi rigs bzhin//* (= *na janma maraṇam ceva tulyakālam hi yuḥyate//) 「生と死がじっさい同時には存在しないように。」とあり, 一部ながら下線部分に相違が推察される⁸⁾。

一方, 興味深いことに, 青目注にも当該偈は存在しない。というよりは, 青目注は, 「生成」と「破壊」とを入れ替えた内容の第3偈⁹⁾と合体させて第3偈として「成壊共有者 云何有成壊 如世間生死 一時俱不然」(=成と壊と共にして有らば, 云何が成と壊と有らん。世間に生と死と, 一時に俱なること然らざるが如し。)として訳出する。このように青目注は, 第3と第5の両偈を合体させ, 第3偈として訳出するが, 一方でまた注釈部を見るかぎり (T vol.30, 27c24-28a10), 青目は『仏護注』等と同様な文脈で注釈をなしている。このことから, 青目は第5偈の存在を少なくとも知っていたと推察される。ただし, 青目自身が注釈を著す段階ですでに当該偈をはずしていたのか, あるいはまた青目注には当該の第5偈が引用されていたものの, 羅什が第3と第5の両偈を合体して訳出したのか, 事情の詳細は不明である。ともあれ, 新出『中論頌』は上述の第5偈を欠いている。

結語

以上の考察により, 新出『中論頌』は, 『無畏論』『仏護注』『般若灯論』および青目注『中論』の4者が伝える中論頌の初期伝承の系譜に位置付けられることは明らかである。ただし, 新出『中論頌』は『中論頌』全体の1/4弱に相当する不完全写本であるため, 系統の詳細な確定には, さらなる関連写本の発見に期待せざるをえない。とはいえ, 第4節で論及した3つのポイントはきわめて興味深い。新出『中論頌』には, 『仏護注』を含む3注釈書所引偈の内容とは異なる複

数の箇所が注目され、いずれも青目注所引偈に対応している。

- 1) See Saito [1986].
- 2) Ye [2007a] pp.117–130.
- 3) See 斎藤 [1987], Saito [1995], Ye [2007b].
- 4) 唯一 MK 10.5a に *prāpyate* (MK ms) と *prāpsyate* (MK in BP) の相違があるが、残念ながら後者のテキストは、写本では文字判読が多少なりとも困難な箇所である。Cf. Ye [2007a] p.121 (n.8): Ye [2008] p.135.
- 5) See Ye [2007a] p.122 (n.1), Ye [2008] p.137 (n.2).
- 6) ここでは紙幅の制約もあるため、論証の詳細は Ye [2007b] pp.156–167 を参照されたい。
- 7) *vinā vā saha vā nāsti saṃbhavo vibhavana vai/ vinā vā saha vā nāsti saṃbhavo vibhavana vai//* (21.1) (LVP p.410.8–9; de Jong, p.28).
- 8) PSP 同偈後半部 Tib: *skye ba 'chi dang dus geig tu// yod pa nyid ni ma yin no//* (D 'A 135a7–b1, P 'A 154b3–4).
- 9) *saṃbhavenaiva vibhavḥ kathaṃ saha bhaviṣyati/ na janma maraṇaṃ caiva tulyakālaṃ hi vidyate//* (21.3) (LVP p.411.11–12; de Jong, p.28) (第5偈とは下線部のみ相違する。)

〈参考文献〉

- Saito Akira [1986]: “A Note on the *Prajñā-nāma-mūlamadhyamakakārikā* of Nāgārjuna”, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 35-1, pp.484–487.
- [1995]: “Problems in Translating the *Mūlamadhyamakakārikā* as Cited in its Commentaries”, *Buddhist Translations: Problems and Perspectives*, Delhi, pp.87–96.
- Ye Shaoyong [2007a]: “The *Mūlamadhyamakakārikā* and Buddhapālita's Commentary (1): Romanized Texts Based on the Newly Identified Sanskrit Manuscripts from Tibet”, *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University*, vol.10, 2007, pp.117–147.
- [2007b]: “A Re-examination of the *Mūlamadhyamakakārikā* on the Basis of the Newly Identified Sanskrit Manuscripts from Tibet”, *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University*, vol.10, pp.149–170.
- [2008]: “The *Mūlamadhyamakakārikā* and Buddhapālita's Commentary (2): Romanized Texts Based on the Newly Identified Sanskrit Manuscripts from Tibet”, *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University*, vol.11, pp.105–151.
- 斎藤 明 [1987]: 「『根本中論』チベット語訳批判」『仏教研究の諸問題』(平川彰編) 山喜房仏書林, pp.221–246.

(平成 19–22 年度科学研究費補助金・基盤研究 (A) による研究成果の一部)

〈キーワード〉 ナーガールジュナ, 中論, 中論頌, 仏護注

(東京大学教授, Ph.D.)